末黒野

すぐろの

末黒野
平成二十三年十月五日発行　第六十六巻第十号（通巻七八二号）

10月号（通巻782号）

籐筵

小川玉泉

南天の花房撓め雨止まず

乾拭きに飴色増しぬ籐筵

老鶯や湖より白む山の朝

余震なほ川遡る水海月

手の平にわづかに余り水海月

海風を入るる江ノ電夏つばめ

峰雲の頂目指し鳥一羽

日は西に目隠し兼ぬる青簾

八十路越え西日まみれのへぼ詩人

渋滞に巻き込まれをり大西日

ゆりの木の緑蔭に人待ちにけり

身ほとりを風のつつめり昼寝覚め

夏座敷

松本三千夫

無愛想に並ぶ電柱青田道
参道の杉の直幹雲の峰
岩潜る流れ私語めき夏落葉
教へ子ら還暦となり合歓の花
竹林は風揉んでをり旱梅雨
梅雨明やパン屋朝より香ばしく
父の眼鏡使はず捨てず土用干
流木のオブジェ置く店土用波
句の色紙紺地金粉夏座敷
古雑誌積める廊下の暑さかな
噴水や菊の御紋の記念艦
西日の玻璃裸マネキン胸高く

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

梅雨晴　菅野日出子

梅雨晴や法鼓とどろく大伽藍
四阿を囲む紅蓮浄土めき
鷺草を育む水のきらめきぬ
梅雨空や入江に舫ふ屋形船
汗滂沱ひるなほ暗きコンコース
針治療終へて炎暑の町へかな
忘れぬし行李の底の藍ゆかた

朝顔の蕾　菅野蒔子

新聞もテレビも熱中症報ず
梅干せる通りすがりの家の庭
寝たきり予防講座受講の汗拭ふ
草取りの跼めば隠る草の丈
夏負けて家事万端の手抜きかな
朝顔の蕾期待のふくらめり
台風予報眠れぬ夜の手や足や

歎異抄　城戸緑

万緑に添ふ渓谷や水吠ゆる
梅雨蝶の木立抜けゆく白さかな
夕顔や形見となりし歎異抄
紫陽花や又雨となる約束日
潜るたび齢の増ゆる茅の輪かな
北限は三浦と聞くや浜おもと
網元の庭に蛸壷雲の峰

滴り　熊切光子

不意に湧くあそび心や七変化
しなやかに竹林を抜け黒揚羽
天空の濁りを支へ燕子花
竹の皮脱ぐかはたれの刻とまり
滴りの一音づつの光かな
斑猫の振り向きざまの目のひかり
隧道の滴る谷浴びにけり

木洩れ日　河鹿笛　堺昌子

木洩れ日の蟻の門渡り一里塚
渓流の音とひびかひ河鹿笛
花好きは母親ゆづり菊を挿す
音あらず蓮の花の開きけり
竹寺の静寂の深く半夏生草
斑猫や昼なほ暗き杣の道
石庭や山ほととぎす真向ひに

睡蓮　鈴木一三

初採りの茄子の紫紺を漬けにけり
川風におはぐろ蜻蛉運ばれり
睡蓮や経のまつはる鎖樋
父の忌や仏間に籠るメロンの香
推敲の得心ゆかず星涼し
諍ひのあとのむなしさ水中花
花魁草咲き郷愁のつのりけり

青炎集

小川玉泉選

横浜　辻井ミナミ

長堤の風道見せて夕茅花
昼顔に海風あふれ岩畳
青田風鷺の冠羽の見え隠れ
黒南風や海へ傾るる千枚田
セコイアの切つ先の風夏の月
風無くて南部風鈴扇ぎけり

横浜　太田良一

鎌倉や矢倉のなかの梅雨の蝶
ふるさとに籍置く詩誌や雲の峰
再会の友の禁酒や心太
指先に妻の怒りや胡瓜もみ
夕虹や水平線を貨物船
夏雲や聖書片手の聖橋

横浜　原和三

父の日やつひに携帯持たざるる
光芒や石仏へ舞ふ竹落葉
河骨の花のきりりと東慶寺
風道の葉裏のしるき池の蓮
影涼し帝釈天の松大樹
涼風の江戸川堤草団子

横浜　浅川幸代

手を触れてさくらの大樹影涼し
風筋をさけて風鈴吊しけり
あるがままくらす他なし青すだれ
涼しさや堰を乗り越え水の青
鉢植えの紫陽花雨の庭へ置く
明易し大きく富士の見ゆる窓

横浜　戸田澄子

梅雨に咲き銀盃草の白の冴ゆ
沙羅の花散りても白し芙美子の忌
夏草や芭蕉笑まはむ夢の跡（平泉世界遺産）
独り居の水飯食ぶや芙美子の忌
日盛りを来し少年の豆腐買ふ
点滴に命預けて夫の夏

横浜　橋場美篤

菖蒲田の吹き抜くる風むらさきに
紫陽花やきのふの湿りけふの照り
文庫本めくりし風の梅雨湿り
四代の揃ふ婚の儀梅雨晴間
緑さす山玻璃越しに祝ふ婚
黙々と鮎釣人の気負ひかな

千葉　鈴木礼子

湿りたる音して落つる沙羅の花
オリーブの花の香幽か訪ひし門
しみじみと産土詣で青田の香
街路樹の間に夏の茜雲
草取りの区切りを余し骨惜しむ
網戸透く月満ちてをり仕舞風呂

横浜　池谷鹿次

香水や飾り気のなき一婦人
一面に蓮の浮葉やにごり池
時の日の正午に合はす古時計
潮風に吹かるる砂丘とべら咲く
風穴の涼しきことよ時忘る
白南風の松原高き月明り

横浜　中山良子

水槽の沢瀉咲きぬ町住まひ
ペチュニアに強き日差しや芙美子の忌
浜木綿の白妙夜の花明り
三重の塔見え隠れ竹の秋
天王山登りきつたり栃の花
青藍や水無瀬の末の桂川

横浜　杉山弥生

列に付き無心にくぐる茅の輪かな
神苑の池面を叩き半夏雨
初鳴きの蜩勢ひ無かりけり
露座仏の裳裾を濡らし岩煙草
手に馴染む抹茶茶碗や竹落葉
菩提寺の泰山木へ日照雨かな

耕土集

横浜　中村　弘

電柱の影に身を詰め赤信号
青田風本堂全て開け放ち
磯髷を垂るる夏潮子に乳を
浜昼顔高き波音地に響き
昼顔や乙女の如き紅淡く

山本　茂子

梔子にしばしの留守を告げて発つ
大束の伽羅蕗並ぶ道の駅
摘みたての青紫蘇そへて二人膳
蛇口より声の出さうな炎暑かな
炎天のスクランブルを駆け抜けぬ

土屋　実郎

蟻（まくなぎ）を払ひはじまる地鎮祭
通夜帰り中天夏の月歪み
プランターの田水をさをさ怠らず
三伏や癌病院をはしごして
時無しに老の手習明易し

松本三千夫選

北郷　和顔

吾が古希を祝ぐ一盞や芒種の日
梅雨の川抗ふ岩の河童橋
葉の陰の二日見ぬ間や化け胡瓜
かにかくに衆議一決冷奴
夕張の夕日のごときメロン食む

鶴見　董子

黄泉の国かくもありなむ蛍の夜
仏像を拝し湖北の青葉風
マニキュアの赤き指先ところ天
湯の宿の鏡のゆがみ梅雨の月
緑蔭や足裏楽しき石畳

正谷　民夫

大海なぞ知らぬ存ぜぬ蟇
梅雨明けや風の厚みの増してをり
夕暮るる箱根全山夏霞
浜に干す海女の磯着や夏旺ん
頂上の小屋に翻翻氷旗

裂織の機音こぼれ揚羽蝶　横浜　細島　孝子
茅葺の峠の茶屋やところてん
里山を鳴き晴らすなり時鳥
鮓桶の箍のゆるみや夕厨
蛍落つエアポケットのあるやうに

駆け来る客待ちてバス発つ立葵　川崎　平澤　侃
空港の大き荷物やアロハシャツ
涼しさや水車離るる水の嵩
塩かげんよき鮎を食ふ近江かな
根本中堂不滅の燭の涼しさよ
ゆつくりと生きてゐますよ蚕殻焚く　横浜　石田　朝子
桃の香の仏間に残り送り盆
背を伸ばし野外コーラス若き等と
聞き返す事ふえてをり蟬時雨
補聴器も眼鏡もはづす昼寝かな

高波を連れて海月の押し寄する　都留百太郎
冷麺の喉にしこしこ江戸切子
明易の猫に餌やる老婦人
沖つ波眩しかりけり佐渡夕焼
溜り場に猫の見えざる大暑かな

演奏の果てし家路や梅雨の月　鈴木　芙蓉
節電の街の賑はふ祭りかな
学童のソーラン節や夏祭
廃校のバックネットや蔦茂る
朝風に駆け出す子らや青田道

南天の花こぼれをり裏鬼門　内田　三郎
たそがれの風を匂はせ透かし百合
新茶汲み懐しき歌思ひ出づ
谷間のせせらぎ蒼し花山葵
枕辺に富士の名水熱帯夜

灼くる日やレバノン杉の蔭の濃く　浅岡　麻實
甚平や豆腐半丁賽の目に
菜の浮きし厨の水も打ちにけり
落し文手に載せて観る虫嫌ひ
知られたくなき事もあり灸花

カーテンを洗ひて広き夏の部屋　町田　伴　秋草
友や逝く梅雨雲重く垂れ籠めて
白雨過ぎ子らの遊べる水溜り
転び寝や網戸を抜けて届く風
深川や祭の笛の野暮ならず